



〈新著批評〉瀧本誠一著 「日本經濟學說ノ要領」

福田，徳三

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 8(3):513-523

(Issue Date)

1910-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051532>



新著批評

法學博士

福田徳三

瀧本誠一著

日本經濟學說ノ要領

發行所 吉川弘文館

紙數一三六頁

敬友瀧本誠一君ノ近業『日本經濟學說ノ要領』ハ一昨四十二年十一月ノ出版ニ係ルモノナルガ今日マデ何レノ専門雜誌ニモ批評ヲ載セタルモノナキガ如シ。予ハ甚ダ遺憾ニ感ズルモノナル

ガ故ニ、此種著書ニ對シテ批評ヲ企ツル資格ナ
キヲ願ミズ、一讀シテ得タル感想ヲ筆録シテ、
世ノ讀書人ノ參考ニ供シ、併セテ著者ノ教ヲ請
ハント欲スルモノナリ。

著者ノ自序ニヨレバ本書ハ近日公刊セラル可
キ『日本經濟論鈔』ナル書ノ序論トシテ起稿セラ
レタルモノニシテ、而シテ内容ヲ三章ニ分ツ

(一)經濟學ノ意義

(二)支那學說ノ勢力

(三)學說ト制度ノ關係

是レナリ。

經濟學ノ意義ノ章ニ於テハ徂徠、春臺、信淵
考祺、蕃山等ノ經濟ナル文字ニ對スル說ヲ列舉
シ、徳川時代ニ於ケル經濟學ナルモノハ政治學
ト更ニ異ル所ナクシテ殆ンド其別名ト稱スルモ
不可ナシトノ斷案ヲ下シ、唯新宮涼庭ノ如キ經
濟ト政事トヲ區別モノナキニアラザレドモ其區
別甚ダ明晰ナラザルヲ言ヒ、要スルニ經濟學ハ

取モ直サズ政治學ヲ意味シタルコト疑ナシトセ
リ、而シテ著者ハ之ト比較スル爲メニホツプス
ハリントン、ロツク、否ナヒユームスラモ亦經
濟學ト政治學トヲ明確ニ辨別シタルモノニ非ル
ヲ舉ゲフキジオラクラツト亦此嫌アリテ政治學
ノ中ヨリ經濟學ヲ篩ヒ出シタルハアダム・スミ
スナルヲ述ベスミスニ於テモ未ダ其篩ヒ出シノ
充分ナラズリカルド出テ、始メテ全然獨立セル
一科ノ學問タル形式ヲ有スルニ至レリト言フ、
續テ醇正經濟學ト應用經濟學、經濟ノ學ト術ト
ノ區分ニ及ビ、其不當ナル由ヲ說キ而シテ曰ク
『近世ノ學者ハ多ク斯學ヲ以テ綜合的社會學ニ
屬スル所ノ一學科トシアラユル人間社會ニ於ケ
ル經濟的現象ヲ各方面ヨリ講究論述スルヲ以テ
其目的トナシ隨テ古今内外ノ制度歴史ハ悉ク經
濟學者ノ轍中ニ入ラザル可ラザルニ至レリ』ト、
著者ハ續テ我國ノ經濟學ハ實際多クハ社會的政
治學ニシテ近世ノ所謂社會政策ノ思想ヲ含ムモ

ノ多キ次第ヲ本居宣長ノ言ヲ以テ例證シ、蕃山
徂徠、信淵、山陽等ノ所說皆多ク然カルヲ掲ゲ
『社會問題ハ必ズシモ悉ク之ヲ歐米ノ學說ニ歸
スベカラズ我ガ舊時代ニ於ケル學者ノ遺書ヲ仔
細ニ熟讀玩味スレバ或ハ之ヲ遠ク海外ニ求メズ
トモ頗ル重要ノ學說ヲ發見スル事ナキニアラザ
ルナリ』ト言ヒ、轉ジテ我邦ノ經濟學說ガ其根
本ヲ道德主義ニ置キタルコトヲ叙シ『彼ノ番頭
經濟學 (Shop-keeper's Economy) 犬豕哲學 (Pig
Philosophy) 鼓吹者ガ云ヘル如ク、道德ノ分子ヲ
斯學ノ外ニ除外シテ財ヲ蓄積スルコトヲ先務ト
スベシトスルニアラズ』トノ痛棒ヲ下シ、節儉
ノ如キモ道德ノ見地ヨリ鼓吹スルモノニ外ナラ
ザル所以ヲ蕃山ノ言ヲ引テ明ニシ、再ビ轉ジテ
倫理ト經濟トニ關スル歐米ノ學說ヲ評論シ『之
レヲ要スルニ我ガ舊時代ノ經濟學說ト今日吾人
ノ論ズル經濟學說ト相一致シ相和合スルノ接觸
點ハ、前者ガ元來政治學トシテ社會問題ニ重キ

ヲ置ケルガ如ク、後者ハ近年夫ノ偏狹ナル古學
派ヲ排斥シテ其ノ講究ノ範圍ヲ擴張シタル結果
所謂經濟學ハ一般ノ社會學ト大ニ接近シタルノ
點ニ在リテ存ス』ト結論セリ。而シテ曰ク『夫
ノマンチエスター學派ノ如ク學問ノ狹隘ナル範
圍ニ跼蹐スル者ハ或ハ我日本ノ舊時代ニ於テハ
一ノ經濟學說ナシトノ斷定ヲ下サンモ亦知ルベ
カラズト雖モ吾人ノ眼ヲ以テ之ヲ見レバ豈啻ダ
然ラザルノミナラズ或ル種類ノ問題、殊ニ社會
政策ニ關聯スル問題ニ至リテハ彼等ノ所說ニシ
テ斯學ノ範圍ニ屬シ、研鑽講究ノ勞ニ値スルモ
ノ鮮シトナサルベシ我ガ日本ノ舊時代何ゾ必
ズシモノノ經濟學說ナシトセンヤ』ト。
是レ著者第一章ノ要領ナリ、吾人ハ之ニヨリ
テ、著者ガ經濟學ノ一切ニ對スル根本的立場ヲ
窺フヲ得ルモノナリ。而シテ亦タ著者ガ日本經
濟學說ノ研鑽ニ心身ヲ勞スル茲ニ數十年ナル所
以ノ動機ヲ想察スルヲ得ルモノナラズンハアラ

ズ。瀧本君ガ日本經濟學史ニ於テ殆ンド匹儔ヲ見出サル『ラーソリチー』ナルコトハ同人ノ間ニ隱レナキ定論ニシテ、而シテ君ノ篤學ナル凡ソ事經濟、制度、政治ニ關スル邦書ハ君ガ書庫ニナキモノハ亦タ他ノ何レノ處ニモナキコトモ人ノ熟知スル所ナリ。此ノ熱心ト態度トヲ以テ而シテ此ノ豐富ナル材料ヲ左右ニシテ、日本經濟學史ノ研究ニ身ノ老ユルヲ覺ヘザル瀧本君ノ所論ノ一々信賴ス可ク、敬服ス可キモノナルコトハ殆ンド先決問題ト云フモ不可ナラジ、唯吾人ガ先ヅ預リ聞カンコトヲ欲スル所ハ抑モ經濟學其モノニ對スル著者ノ立場之レナリキ、然ルニ以上予ガ摘要シタルガ如ク此書ニ於テ吾人ハ此要求ヲ充サル、コトヲ得タルナリ、今之ニ對シテ私見ヲ陳ブルコトヲ許サル、ナラバ、予ハ將サニ言ハント欲ス、著者ハ廣キ意味ニ於テ、經濟學研究者ノ最新ノ立場ニ立ツモノニシテ、殊ニ所謂歷史學派經濟學者ノ地盤ニ其根據ヲ置

クモノナリ、著者ハ獨リ日本經濟學史ニ於ケル『ラーソリチー』タルノミナラズ、西洋ノ經濟學史ニ於テモ亦タ該博ノ名ヲ有ス可キモノナリ、唯予ガ聊カ異論ヲ挾ミ度キ點ハ倫理ト經濟トノ關係ニ對スル現今ノ經濟學、社會政策ノ見地ト德川時代ノ我邦諸學者ノ見地トノ間ニハ容易ニ除去シ得可カラザル根本的溝渠ノ存スル次第ヲ明論セザル一點ニ在リ、此點ハブレンタノ氏ノ『歷史ニ於ケル倫理ト經濟』ノ一篇出デ、克ク人ノ惑ヲ釋キタリ予モトマス、アキナス(トマスダキノ)ノ學說ニ就テ小論ヲ試ミ置キタリ昨年十二月ノ社會政策學會大會ニ於テ畏友内田博士モ亦佛教ノ思想ノ中(殊ニ『慈悲』ノ念ニ就テ、又ハ『布施』ト云フコトニ付テ)今日ノ社會政策ニ同ジキ點アルヲ論述セラレタリ、予ハ瀧本說ニモ内田說エモ同意ヲ表スル事ヲ辭セザルモノナレドモ、唯同ジキ點ヲ掲グルノミニテハ甚不充分ト思フモノニシテ所謂 dazu sind die Beiden,

gleich und *ungleich* genug. (『ソレニハ兩者ハ同ジキ點モ、異ナル點モ澤山ニ在リ』)テフ次第ヲ同時ニ説カザレバ人ヲ謬ノ嫌アルニハ非ラズヤト考フルモノナリ、但シ斯ク云フモ予ハ佛教ニ就テモ我邦ノ經濟學史ニ就テモ殆ンド門外漢タルヲ忘ル、モノニアラズ、サレバ予ガ研究進ムノ後ハ或ハ内田、瀧本兩説ニ全然裏書スルコト、ナルヤモ計ラザレドモ、今日未熟ノ見聞ヲ以テ妄言スルヲ許サル、ナラバ、予ハ以上ノ如ク云ハント欲スルモノナリ、此點ハ或ハ論ジ詰レバ同處ニ落ツルカモ知レザレドモ、亦次第ニヨリテハ聽テ日本經濟學史、日本經濟史ニ對スル根本見地ノ差異ヲモ生ズルコト、ナルナキヲ保ス可カラズ、故ニ茲ニ一言シ置クモノナリ。

第二章『支那學說ノ勢力』ハ『明治現代ノ經濟學者ナルモノガ如何ニ歐米學說ノ輸入商タルノ實アルカハ且ラク措キ我舊時代三百餘年間ノ碩學鴻儒ナル者ガ悉ク支那學說ノ奴隸ニシテ一モ

二モ皆其糟粕ヲ甜ルニ過ギザリシハ余ノ喋々ヲ待タザル所ナルベシ故ニ其ノ時代ニ於ケル經濟說ハ學派ノ如何ニ拘ラズ徹頭徹尾支那學說ノ燒直ニシテ殆ンド一點ノ創見ニ出タルモノナシト言フモ亦過言ニアラザルナリ』トノ宣告ヲ「ジャステフハイ」ス可ク幾多ノ漢學者ヲ始メ昆陽、宣長、信淵等ヲ列舉シ、殊ニ著シキ例トシテ田制論(井田法)ニ關スル諸學者ノ說ヲ縱横ニ評騭シ、次ニ徂徠ノ學說ヲ指摘シ、『若シ此意ヲ充分ニ擴充シ、之ヲ社會ノ事實問題ニ適用シテ所謂安民ノ根本ハ國民ノ經濟的須要ヲ充スニ在リテ存スルコトヲ明示シタラムニハ近世ノ意味ニ於ケル經濟學開祖ノ月桂冠ハ願フニ必ス蘇國學士(アダム、スミスヲ指ス)ノ頭上ニ落チスシテ此翁(徂徠)ノ有ニ歸シタルナルベキヲ疑ハザルナリ、畢竟護國ノ文豪モ卓見此ニ及バズシテ徒ラニ古文辭ノ講習ニ勉メタルヲ以テ遂ニ人ニシテ詩盜判ヲ宣告セシムルニ至リタルハ豈又遺

憾ノ至ナラズヤ』ト結論セリ、

此章引照該博、著者ニアラザレバ聞ク能ハザル創聞ノ箇條尠カラズ、予自ラ最モ益ヲ得タルハ蔭山元質ノ田祿圖經ニ關スル叙述之レナリ、予ハ齋藤高壽ノ井田圖說以下ノ雜著(萬尾時春ニ井田圖考ナル書アリ、思フニ勸農固本錄ノ著者ト同人カ、此書瀧本君ニ引照ナシ、或ハ價值ナキモノナルガ爲メカ、教ヲ待ツ)ヲ得テ讀ミタレドモ、此等諸說ノ本タル元質ノ圖經ハ全ク見ルヲ得ズ、今著者ノ記スル所ニヨリ之ヲ知ルヲ得タルハ感謝セザルヲ得ザルナリ、而シテ此章ノ要旨タル點ニ就テハ予モ亦全然同様ニ感ゼザルヲ得ザリシモノナリ、又々著者ガ歐羅巴ト比較評論スル所概ネ適切増減ス可キヲ見ズ、井田法ニ關スル論殊ニ然リ、著者ノ此章ニ於ケル自家藥籠中ニ藥ヲ探ルガ如ク從テ論ジ從テ博引シ從テ旁證ス、讀ムニ痛快ニシテ、讀ミテ後去リ難キ印象ヲ殘ス、唯予ハ左ノ點ヲ以テ著者ニ

質サント欲ス

(一) 徂徠ガ近世經濟學ノ開祖タリ能ヒシト云フハ所謂筆ノ「アヤ」カ抑モ亦著者ハ眞ニ爾ク信ズルモノナリヤ

(二) 徂徠スラ近世經濟學ニ入ラズ支那學說ノ支配ノ下ニ立ツ其以下ノ學者ヨリ成ル徳川時代ノ經濟學說ガ倫理ト經濟、社會政策ニ關シ最新學者ト全ク同ジキ立場ニ立ツトハ承服シ難キニアラズヤ、即チ此第二章コソ益々徳川時代ノ經濟學說ト近世ノ經濟學說トノ間ニハ超ヘ難キ一大溝渠ノ存スルコトヲ有力ニ立證スルモノニアラザルカ(殊ニ禁慾主義ニ就テノ倫理的見地ヨリ見テ)

(三) 著者云フ『歐米ニ在テモ、我日本若クハ支那ノ或時代ト同様ノ時代ニ於ケル經濟說ハ彼此別ニ何等ノ關係ナキモ殆ド全ク符節ヲ合スルガ如キ說ナキニアラザレバ我舊時代ノ學說ニシテ正シク支那ヨリ輸入シタル

ト思ハル、モノ、中ニモ其ノ實左ニアラズ
シテ我學者ガ獨立ニ案出シテ偶然ニモ支那
學說ト暗合シタル者ナキニアラザルベシ』
ト、然ラハ禁慾主義ハ德川氏ノ治世ノ根本
的要求ト全然沒交渉ナリシヤ、或ハ一定ノ
時代ガ産ミ出ス一定ノ學說ニシテ支那學說
ガ偶々之レニ好材料ヲ供シタルモノニアラ
ザリシカ、徂徠ガ之レヲ脱シ得ザリシニハ
此邊ノ事情全ク存在セザリシヤ、否ヤ、

第三章 學說ト制度ノ關係ハ右ノ予ノ第三點
ノ質問ト殆ド同ジキ意味ヲ詳說シタルモノニシ
テ、要スルニ德川時代ハ封建ノ世ナリシ故其學
說モ亦封建のナリシ所以ヲ一々仔細ニ考證シタ
リ、而シテ此章殆ンド全篇ノ半ヲ占ム、著者用意
ノ存スル所以ヲ窺知ス可キ也、此章ハ經濟史ト
經濟學史トノ關係ニ關シ邦語ニテ書カレタル一
切ノ論文著述中第一位ニ推ス可キモノト言フモ
太過ナル可シ、而シテ又此章ニ於テ著者ガ最

近ノ經濟史研究ノ立場ニ立ツコトヲ充分ニ看取
スルヲ得ル也、唯其レ歐洲トノ比較評論ノ節ニ
就テハ予異見ヲ有スル點少カラズ然レドモ此ハ
予一家ノ私見ニ止ルモノナルヲ以テ今ハ全ク省
キテ言ハズ、唯一ヶ條省キ能ハザルモノアリ、
即チ著者ハ德川時代ノ封建制度ト其以前ノ封建
制度トヲ殆ンド同様同物ナルカノ如ク見、從テ
歐洲封建制度トノ比較ニ於テ稍『アナクロニズ
ム』ニ陷レルニハアラズヤト思ハル、論ヲ立テ
タルコト是レナリ、予ハ德川時代ノ封建制度ハ
殆ンド歐洲ニ匹儔ヲ見出シ得ザル我邦特有產物
ナリトノ宿論ヲ有シ『日本經濟史論』ニ於テ其一
端ヲ述べタルコトアリテ、今日ニ至リテ未ダ此
蒙說ヲ捨ツル能ハザルモノナリ、著者ハ歐洲ノ
例ヲ引クニ純然タル封建時代ノ事ヲ以テスルモ
是ハ少シク無理ナルニアラザルカ、此點思フニ
予ノ私說ハ孤立ニシテ、瀧本君ノ同論者ノ數ハ
『レギヨン』ナルベシ、内田博士ノ『近世史』ハ僅

ニ叙論ニ止ル故詳細ナルコトハ分ラザレドモ、博士モ此點ニ於テハ瀧本君ニ近キ立場ニ立タルルモノ如シ、サレバ著書ノ批評中ニ味方少キ蒙説ヲ提出シテ云々スルコトハ見合セ他ノ機會ニ於テ改メテ瀧本君ノ教ヲ受クルニ讓ル可シ、茲ニハ唯少クモ一人ノ異論者ノ存在ヲ報告シ置クノミ。

以上大體ニ涉リテ述ブル所ニヨリテ、讀者ハ瀧本君ノ近業ノ如何ニ重要ナル獲物ヲ吾人ニ提供スルモノナルカノ一斑ヲ察シ得タル可シト信ズ、聞ク所ニヨレバ著者ノ『日本經濟論鈔』ハ稿既ニ成リ今ハ唯印刷ヲ待ツノミナリト云フ、唯紙數數千ニ涉ルガ故ニ適當ノ出版者ヲ得ルニ困難アリト、予ハ我邦經濟學ノ爲メニ否我昭代ノ文運ノ爲メニ、一日モ早く出版者其人ノ出デシコトヲ熱望シテ已ム能ハザルモノナリ、而シテ其出版ヲ待ツマデモナク此ニ紹介セル『要領』ノ一人ニテモ多ク讀ム人ノアラムコトヲ希ハザル

ヲ得ズ、著者ノ名利ニ淡泊ナル如此苦心ノ作ヲ成スモ之レヲ自費ニテ出版スルニ止メ、敢テ購讀者ノ多カラムコトヲ欲セザルハ學者トシテ誠ニ欽仰ニ堪ヘザル次第ナレドモ、書ヲ作ルハ讀マレンガ爲、讀マレンニハ讀ミ得可キ機會ヲ與フル必要アルコトヲ記セザル可カラズ、而シテ予ハ苟クモ經濟學ニ志アル凡テノ人士殊ニ學生ノ讀本トシテ此書ハ必ズ推薦セラル可キモノナリト確信スルモノナリ、

大體ハ右ニ止メ次ニ、書中箇々ノ記述ニ就テ通讀ノ際心付キタル一二ノ點ヲ舉ゲテ、著者ノ一考ヲ煩ハサント欲ス。

(1) 第二頁 三行ニハ正司考祺トアルニ

第八十五頁 頭註ニハ庄司考祺トアリ

仍テ佐村氏ノ國書解題ヲ繙クニ庄トナセリ、予ガ私藏ノ『經濟問答秘錄』ノ表紙裏ノ扉ニハ正司考祺編述トアリ、何レガ正シキヤ、兩作ラ正シキヤ、教ヲ乞フ、若シ考祺自ラ兩作ラ

用キシニ非ルナラハ何レカ一方ニ定メテハ如何、日本支那ノ人名ハ予等ノ如キモノニハ甚難澁ナリ、成ル可ク助ケラシタシ

(2) 引照書ニ出來ル丈ケ出版又ハ序文中ノ年號ヲ併記セラレタシ、數版アルモノハソレモ掲ゲラレタシ、是レ著者ニ於テハ容易ノ業ニシテ而シテ讀書子ノ其惠ニ浴スルコトハ甚大ナラン、

(3) 正司考祺ニ『今世間ニ貨殖興利ヲ以テ經濟ト云ハ謬也』トノ說アルコト著者引用スル如シ、然ラバ德川時代(少クトモ經濟問答秘錄ノ著サレタル天保ノ初)ニハ既ニ經濟ヲ以テ Erwerbsleben ノ意ニ普用シタルモノト見ユ、然ラバ著者ノ論斷(經濟學ハ政治學也)ヲ多少「モチフアイ」スル必要ハナキヤ、

此點ハ予ハ殊ニ重キヲ置ク要アリト思フ、獨リ著者ノミナラズ從來德川時代ニ用ラレタル經濟ナル文字ハ今日ノ用法ト全ク異リ今日ノ

意味ニテ經濟ナル語ヲ用キタルハ全ク西洋學問輸入ノ賜ナリトノ說ヲ聞クコト屢々ニシテ予ハ其說ヲ信仰シ居タリ例バ河上助敎授ノ經濟學原論二三頁『恰モ維新ヲ一期トシテ經濟ナル文字一變シタルノ觀アリ、維新前ニ於テハ所謂經濟トハ國土ヲ經營シ人民ヲ濟救フノ義(經濟問答)凡ソ天下國家ヲ治ムルヲ經濟ト云フ世ヲ經ケ民ヲ濟フト云フ義ナリ(經濟錄)ト云フガ如クニ經濟ヲ解セリ』トアリ唯橋本敬簡ノ經濟隨筆ハ私人ノ經濟ヲ論ズル旨附記シアリ、金井博士モ亦粗同様ニ論ゼラレタリ、成程學者ノ理想的定義ヨリ云ヘバ然リシナランモ考祺ガ『今ノ世ニ……ト云フハ謬也』ト特ニ指摘シタルヲ以テ見レバ其頃既ニ貨殖興利ノ意ノミニ經濟ナル文字ヲ使用スルコト可成行ハレタルモノニアラザルカ、然レバ維新ヲ一期トシ前後ヲ分ツハ如何、此點瀧本君ノ指導ヲ待ツ、

(4) 歐名ノ邦訓ニ疑シキモノ尠カラズ、例ヘハ

六頁 クエス子ーハケ子ーニ非ルカ

佛語ノ〇ハ英語ト違ヒ全ク 同ト同

音ナリ

七頁 頭註

八頁 九行

マカローハマカロクニ非ルカ

十三頁 四行

ビールゾンハビエルゾン

十六頁 頭註

カンニングハムハカンニンガム

三十六頁

五行 モーレルハマウラー

同 六行

クーランジャーハ克蘭ジユ

但シ此人ノ名ハフユステル、ド、克蘭ジユ

ト云フヲ正シトス、略シテハ分ラズ

百五頁 九行 「スタツス」ハ「ステータス」

百六頁 四行 「ミヤリー」ハ「メリー」

ノ類其他ニモ猶アリシガ如シ、再考ヲ煩シタシ、

(5) 十頁一行 アダムスミス以下ノ經濟學者トアル

ハスミスモ含ム意ナリヤ、然ラバ是ハ當ラズ

(本誌ニ掲ゲタル瀧本美夫君ノ論文ニ關スル

私論看ラレタシ)

四十七頁 四行ノリカルド以下ノマンチエス

ター學派ガ空論云々、是モリカルドヲ含ム意

ナラバ不當ナル可シ、

(6) 六十九頁 四行徂徠ガ幕府ノ利害ヲ以テ國

家經濟ノ眼目トナシタルハ信淵ニ比シ遙カ高

大ナル見識ナリトノ論同感ニ堪ヘズ之レ前段

云ヘル徳川時代ハ最早純粹ノ封建制度ニアラ

ザルコトヲ徂徠ガ認メタル證左ニシテ私論ニ

力ヲ藉スモノ、如シ、教ヲ待ツ、

(7) 七十一頁一行村落經濟ノ廢滅シタルヨリ莊園

經濟若ハ都府經濟ヲ經テ云々言簡ニシテ誤解

ヲ惹起シ易シ、ペロー教授ガ近ク「社會經濟

史雜誌」千九百九年第三、四冊ニ公ケニシタ

ル論文ヲ見テモ此論斷ハ餘リニ Sweeping ナ

リト云ハザルヲ得ズ、再考ヲ煩ス、

(8)七十二頁、七十三頁、自由都市起リテ云々ノ處右ト同ジ嫌アリ、獨立ノ國家云々ハ伊太利ノ都市ノミ、歐洲全體ニアラズ、此點訂正ヲ乞フ、

(9)八十頁 土地賣買ノ禁止ニ就テハ歐洲ノ方例多シ、英國ノ「コムモンレカヴァレー」ハ何ノ爲メニ生ゼシヤト一考スレバ直チニ分ル次第ナリ、著者ノ痛棒ハ少シ苛酷ニ失セズヤ、

(10)八十五頁 九行「住居轉換ノ禁止行ハレタルコトアリ」ハ少シ奇ナリ、獨逸ニ於ケルSchollengbundenheitハ經濟史上ニ著シキ一般的事實ナルニ非ズヤ、

(11)九十二頁 歐洲ニ於ケル商業敵視說ハ引用妥當ヲ缺ク、又其叙述適確ナラズ、願クハ拙文「トマス、ダキノ」ヲ一讀セラレタシ、

(12)百十九頁。國家自給說ノ處今少シ、「ポイント」ニ中ル様述ラレタシ、ソレニハ拙著「日本經

濟史論」中多少述ベタル所アリ、謹デ高教ヲ仰グ、

猶終リニ著者ノ文章甚ダ明快ナルガ故ニ所謂經濟書ヲ讀ム人ノ訴フル難解ノ憂ハ毫モ是レナキコトヲ附言シ置ク可シ、妄言愚評、謹ンデ瀧本君ノ寛恕ヲ祈ル（一月二十日記ス）